

楔形文字における子音 の重ね書きについて*

池田潤（筑波大学）

キーワード：アッカド語、シュメール語、ヒッタイト語、フリ語、言語接触

1 はじめに

米国のセム語学者・アッシリア学者である G. Buccellati は 1970 年代に graphemic analysis というシュメール系楔形文字（以下、楔形文字と略称する）に関する研究を構想し、これまでにアッカド語の古バビロニア方言、マリ方言、ウガリト方言、アマルナ書簡、エブラ文書等の分析を進めてきた。最近の論文の中で、彼は graphemics を次のように定義する。

Graphemics is the systemic correlation between graphic symbols and phonemes. (Buccellati 1997:5)

そして、彼は graphemics に graphemic values と graphemic (graphotactic) rules という 2 つの研究対象を設定する。前者の例として、Buccellati は古バビロニア方言で DA 記号¹が /da/ と /t̪a/ という音節を表すが、/t̪a/ は表記しないという規則をあげる。後者の例としては、語頭ないし VC 記号²の直後において V(C) 記号が /ʔ V(C)/ を表示する規則が指摘されている。

*本稿は、2003 年 12 月 13 日に京都産業大学で開催された西アジア言語研究会でおこなった研究発表に加筆修正を施したものである。貴重なコメントをくださった出席者諸氏に感謝する。なお、本研究に際して文部科学省の科研費（13410141）「古代オリエントの楔形文字言語間の言語接触の研究」（研究代表者：大城光正）の助成を受けた。

¹楔形文字の記号名は von Soden and Röllig (1991) に従う。

²C（子音）と V（母音）を含む記号名は、表記されたとおりの C と V の組み合わせ（この場合は CV）の音価をもつ記号の総称である。

本稿は楔形文字における子音の重ね書きの問題を扱う。すなわち、 $-(C)VC_i-C_jV(C)-$ という記号の連続が楔形文字言語³においてどのような言語的要素を表記するかについてアッカド語を中心に考えてゆく。したがって、本稿の研究は Buccellati が構想した graphemics における graphemic rules (以下、「表記規則」とする)のケーススタディーとして位置づけることができる。

アッカド語式音節表語限定型シュメール系文字⁴(以下、アッカド文字と略称する)における子音の重ね書きは一般に子音の重なり(gemination、以下「子音重複」とする)⁵を表記すると言われる。ところが、近隣の楔形文字言語に目を向けると、そのような表記規則をもつものはない。アッカド文字における子音の重ね書きは本当に子音重複を表記するのだろうか。そうだとしたら、楔形文字言語間の違いはどのようにして生まれたのだろうか。こうした疑問に答えるために、本稿ではまずアッカド語に子音重複が存在したのかをセム語全般に目を配りながら検証する(第2節)。次に、シュメール語式表語音節限定型シュメール系文字(以下、シュメール文字と略称する)、アッカド文字、フリ語式音節表語限定型シュメール系文字(以下、フリ文字と略称する)、ヒッタイト語式音節表語限定型シュメール系文字(以下、ヒッタイト文字と略称する)において子音の重ね書きが果たす言語的機能の違いを整理したうえで(第3節)、なぜそのような違いが生じたのかを言語接触という観点から説明付けたいと思う(第4節)。

2 セム語における子音重複

2.1 文字論

セム語は前3千年紀から今日に至るまでさまざまな文字で書き記されてきたが、その中で子音重複を表示されると言われる文字は筆者の知るかぎり

³楔形文字言語とは、楔形文字で書かれた言語を指す。主な楔形文字言語として、シュメール語、エラム語、アッカド語、フリ語、ヒッタイト語、ウラルトゥ語がある。ただし、本稿ではエラム語とウラルトゥ語は扱わない。

⁴本稿で用いる文字の分類方式については、福盛・池田(2002)を参照。

⁵子音の重なりと同一子音の連続(e.g. book-case)の違いについては、Ladefoged and Maddieson(1996:75, 92)を参照。

次の3つしかない⁶。

- アラビア文字
- ヘブライ文字
- 楔形文字

このうちアラビア文字が子音重複を表すことについて異論はない。コーランの表記のために後7世紀以後に考案された補助記号のひとつにシャッダがあり、この記号は子音重複を示す⁷。また、アラビア語において子音の重複は弁別的である。たとえば、darasa「学ぶ」とdarrasa「教える」のように子音重複の有無で意味が変わる対語が数多く存在する。

ヘブライ文字にはダゲシュと呼ばれる記号がある⁸。これは文字の中央に打たれる点で、子音重複を示すと言われる⁹。しかし、ダゲシュは子音重複専用の記号ではなく、[+stop]の素性を標示するだけの場合もある。たとえば、ヘブライ文字のラメッド(ל)とダレット(d)は次のように発音されたと一般に考えられている。

	ラメッド	ダレット
ダゲシュなし	[l]	[ð]
ダゲシュあり	[ll]	[d] [dd] ¹⁰

図表1：ダゲシュの読み方

図表1を見ると、ダゲシュには子音重複と[+stop]という2つの無関係な要因が複雑に絡んでいる印象を受ける。ところが、これを子音の弱化階層図(図表2)に照らして見ると、子音重複も閉鎖音化もこの階層図の中

⁶マルタ語や一部の現代アラム語方言(旧ソ連やスウェーデンのアッシリア語など)で採用されたラテン文字は除く。

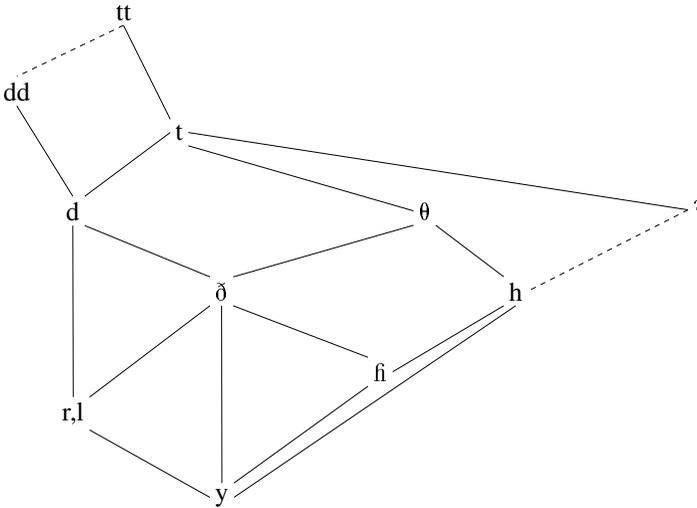
⁷シャッダ記号については、Wright(1967:13-16)参照。Ladefoged and Maddieson(1996:75, 91-95)によると、アラビア語閉鎖音の重複は閉鎖時間の長さによって実現されるという。

⁸ヘブライ語で「パアレ・ハマソラ」と呼ばれる学者によって後7~8世紀頃に考案された記号のひとつ。伝統文法では、子音重複を示す強ダゲシュと閉鎖音を示す弱ダゲシュを区別する。詳しくは、池田潤・高橋洋成・池田晶(2003:67, 82-84)を参照。

⁹Wright(1967:14)はアラビア語のシャッダがヘブライ語の強ダゲシュに相当すると述べている。

¹⁰両者は相補分布をなす。母音が先行する環境(V_)では[dd]と読まれ、それ以外は[d]と読まれる。

で同じ方向性をもつことが分かる。すなわち、ダゲシュには「強化」(弱化的反対)という一貫したはたらきがあることになる¹¹。中世のヘブライ語文学者もダゲシュを調音上のエネルギーの強さととらえているため¹²、ダゲシュは子音重複記号というよりは [+fortis]¹³ を表示する記号と解釈すべきであろう¹⁴。



図表 2：子音の弱化階層図（上から下へと弱化する）¹⁵

¹¹この見方は、ダゲシュという用語がヘブライ語で「強調」を意味することからも間接的に支持される。

¹²Kahn (1997:90) は Hidāyat al-qāri という中世の文献を引き、ダゲシュは「文字を重くし」、文字の「重さ」は「調音器官の筋肉にかかる圧力を上げる」ことによってもたらされると指摘する。なお、Joüon (1996:57) の訳者による注 1 によると、ダゲシュ記号が考案された当初は強弱ダゲシュの区別がなかったという。両者が同一の音声現象だったと仮定するなら、(語頭子音が重複するのは不自然な現象なので)ダゲシュが第一義的に子音重複を表した可能性は非常に低いと言える。なお、Joüon (1996) は訳者による大幅な改定が加えられているため、聖書学では Joüon-Muraoka として引用される。本稿でも以下、この慣例に従う。

¹³Ladefoged and Maddieson (1996:95-99) によると、fortis / lenis は呼吸エネルギー(朝鮮語など)ないし調音エネルギー(ゲルマン語など)の強弱としてとらえることができるが、閉鎖の持続時間や有声性とも無関係ではない。

¹⁴アラビア語では喉音を含むすべての子音をシャッダによって重複させることができるのに対し、ヘブライ語では喉音とレーシュ(r)は基本的にダゲシュをとることができない。Ladefoged and Maddieson (1996:75) の図 3.13 が示すように、声門閉鎖音の重複は音声学的に不自然な現象ではないため、ダゲシュが子音重複であったとすれば、アレフ(?)にダゲシュが付かないのは不自然である。したがって、ダゲシュとシャッダは本質的に異なる現象であったと思われる。

¹⁵Hock (1991:83) より転載。なお、この表は「歯音モデル」であり、他の調音点において

楔形文字には CV 文字、VC 文字、CVC 文字等があるため、同一子音 (C_i で示す) を $-(C)VC_i-C_iV(C)-$ と重ね書きすることにより、子音重複を示すことができるはずである。しかし、文字の重ね書きが音素の重複を無条件に表すわけではない。たとえば、現代英語の *written* /ritn/ における *-tt-* は *t* の重複を表記していない¹⁶。また、 $-CV_i-V_iC-$ というパターンにおける同一母音 (V_i で示す) の重ね書きは楔形文字では母音の重複、すなわち長母音を表さない。/CVC/ のすべての子音と母音の組み合わせに対応する文字があるわけではないため、一部の閉音節は CV_i-V_iC という字句によって表記せざるをえない¹⁷。言い換えれば、アッカド文字には CV_i-V_iC と $/CV_i:C/$ (: は「長さ」を示す) とを一对一に結びつける表記規則が存在せず、「 CV_i-V_iC と CV_iC はどちらも $/CV_i(:)C/$ を表記する」という表記規則がたつことになる。子音の重ね書きが子音重複を示すかどうかは表記規則しだいである。

アッカド文字における子音の重ね書きに関しては、次の3つの事実が参考になる。

- ① 重ね書きされた子音に対しては、ほとんどの場合¹⁸、他のセム語との比較により重複した子音(以下、重子音とする)が想定できる。
- ② 想定される重子音が常に $-(C)VC_i-C_iV(C)-$ と「ダブルで」書かれるわけではなく、 $-(C)V-C_iV(C)-$ と「シングルで」書かれる場合もある。
- ③ ダブルのつづりとシングルのつづりは原則として自由に変異する

も同様の階層が見られる。

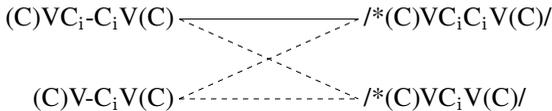
¹⁶Coulmas (2003:100) によると、子音の重ね書きは子音の長さ (e.g. イタリア語式単音型ラテン系文字の *addio* [ad-di:o]) 母音の音色 (e.g. ドイツ語式単音型ラテン系文字の *Motte* [mɔtə])、一文字で表記できない音素 (e.g. スペイン語式単音型ラテン系文字の *ll* [ʎ]) を示したり、表語的に (e.g. 英語式単音型ラテン系文字の *butt* vs. *but*) 用いられたりするという。また、河野ほか (2001:760) によると、朝鮮語式音節型ハングル系文字では子音素の重ね書きによって硬音 (fortis) を表記する。

¹⁷たとえば、/rus/ という音節はアッカド語に存在するにもかかわらず、/rus/ という音価をもつ文字は存在しない。そのため、/iprus/ (parāsu 「切る」の活用形) は *ip-ru-us* や *ip-ru-ús* と書かれる。/rus/ が2字節からなる字句によって表記されるため、 $-CV_i-V_iC-$ と $-CV_iC-$ は明らかに音韻上等価である。仮に $-CV_i-V_iC-$ が長母音を表記するとしたら、*ip-ru-us* や *ip-ru-ús* は /iprūs/ を表記し、/iprus/ を表記するすべが存在しないことになる。なお、 CV_iC という音価をもつ文字が存在する場合、その文字は CV_i-V_iC 字句と自由に変異する。字節、字句等の文字学的単位については、福盛・池田 (2002) 参照。

¹⁸例外については後述する(第3.2節)。

が¹⁹、時代が下るにつれダブルのつづりの割合が増える。しかし、100%に達することはなかった²⁰。

①から、アッカド文字における子音の重ね書きは子音重複を示すと一般に考えられているが、①の例外や②③を考慮に入れると、「(C)VC_i-C_iV(C)と(C)V-C_iV(C)はどちらも/*(C)VC_iC_iV(C)/ないし/*(C)VC_iV(C)/を表記する」という表記規則しかたでられそうにない。この規則は図表3のような対応を意味し、結局のところ、アッカド文字における子音の重ね書きと子音重複は無関係だということになってしまう²¹。そうすると、重ね書きされた子音に対して重子音を想定すること自体が疑わしくなってくるが、そもそもアッカド語に子音重複は存在したのだろうか。



図表3：アッカド文字における子音の重ね書き

2.2 音韻論

アッカド語における子音重複の存在は次の共時的音韻規則や通時的音変化によって証明することができる。

- ① -nC- -CC-
- ② -V:C- -VCC-
- ③ -CC- -{n, m, k, r, ʔ, y}C-

①はセム語に広く見られるnの規則的逆行同化現象である²²。たとえば、アッカド語には iR₁R₂VR₃ という語型をもつ変化形があるが²³、nadānu「与

¹⁹たとえば、/iparras/ (parāsu「切る」の別の活用形)は i-pa-ra-as ないし i-par-ra-as と書かれる。同一文書中にダブルとシングルをつづりが共存することも珍しくない。

²⁰Huehnergard (1986:47)によるとウガリトのアッカド語(中期バビロニア時代)の場合、ダブルのつづりの割合は半分強だという。

²¹アッカド語において子音重複が弁別的であったなら、子音重複を任意に表示するのは腑に落ちない。そこで、筆者はシングルとダブルのつづりによって無声/有聲、fortis / lenis等の対立が示されている可能性を検討してみたが、アッカド語においてそのような対立は認められない。

²²Lipiński (2001:193-194) 参照。

²³R₁、R₂、R₃ はそれぞれ第1、第2、第3語根素(radical)を示す。Vは母音を示す。

える」(語根はNDN)という動詞がこの形をとると、第1語根素のnが姿を消す。その際、/indin/ /iddin/という変化が起きているのは明らかである。nが(消失ではなく)同化しているため、①の規則は子音重複を生み出すことになる。

②は母音の長さを別の形式に置き換える規則で、一部のセム語に見られる。たとえば、アッカド語には抽象名詞を形成する接辞があるが、それはバビロニア方言で-ūt-、アッシリア方言で-utt-と書かれる(e.g. šar-ru-ti /šarrūti/ šar-ru-ut-ti /šarrutti/「王権」の変化形)。セム語には広く逆の現象も見られるため²⁴、これはモーラ数を変えずに語形を変化させるメカニズムとみなすことができる²⁵。したがって、この-utt-においてtは重複している可能性が高い。

③はセム語に広く見られる異化の現象である²⁶。たとえば、アッカド語のiddinに対応する未完結相は古バビロニア方言でinaddinという形をとるが、中期バビロニア方言ではinandinに変化する。この変化は/inadin/ > /inandin/という子音挿入よりも/inaddin/ > /inandin/という異化として説明するほうが自然である。

2.3 記号論

任意に重ね書きされた子音が発音上、実際に重複していたことは別の観点からも間接的に示唆される。Kouwenberg (1997)によると、子音重複をもつと言われる語型²⁷は①目的語や行為の複数性、②行為の継続性、③複数の人間や事物、④習慣的行為等を表すという。

- ① 目的語や行為の複数性: アッカド語の動詞のD語幹は第2語根素が重複するという形態上の特徴をもつ²⁸。D語幹にはG語幹(基本語幹)と比べてさまざまな意味的特徴があるが、そのひとつに目的語や行

²⁴たとえば、Lipiński (2001:181)によると、現代アラム語諸方言において歴史的な子音重複は長母音に置き換えられているという(e.g. yammā > yāma「海」)。

²⁵Reiner (1966:45)は「:」という「長さ」要素をたてることによってこの現象を説明する。すなわち、この形態素をu:tと記述し、:が直前の母音と結びつくと母音を長くし(ūt):が直後の子音と結びつくと子音を重複させる(utt)と解釈する。

²⁶Lipiński (2001:181-184) 参照。

²⁷語型とは、セム語において語形から屈折要素と語根素を取り除いたあとに残るパターンである。訳語については、佐々木(1994)に従った。

²⁸DはDoppelungの頭文字である。

為の複数性がある²⁹。たとえば、nāram ep-te-šum-ma「私はその(= 地名)のために運河(単数)を開いた(G)」(RIME 4, 603:26f)と nārātīm ú-pé-et-ti「私は運河(複数)を開いた(D)」(RIME 4, 603:26f)を比べると、目的語の単複に応じて G 語幹と D 語幹が使い分けられていることが分かる。この場合、目的語の複数性は行為の複数性をも含意する。

- ② 行為の継続性: アッカド語のいわゆる「現在形」は基本語幹で iparras という語形をとり、反復相や継続相を表す³⁰。
- ③ 複数の人間や事物: アッカド語の abu「父」_⌋ aḥu「兄弟」_⌋ aḥātu「姉妹」_⌋ iṣu「木」の複数形は abbū「父」_⌋ aḥḥū「兄弟」_⌋ aḥḥātu「姉妹」_⌋ iṣṣū「木」という語形をとる。いずれの語形も複数語尾をとっているが、それとは別に語幹の子音(いずれも 2 子音語根の第 2 語根素)の重複によって複数性が冗長に標示されている³¹。
- ④ 習慣的行為: アッカド語には parrās-という語型があり、職業や習慣的行為を表す。前者の例として garrābu「床屋」_⌋、後者の例として šarrāqu「泥棒」_⌋があげられる³²。

上記の現象を Kouwenberg (1997) は写像性 (iconicity) という観点から説明する。言語記号において記号表現と記号内容の結びつきが恣意的であるという見解がソシュールの記号論の出発点であるが、両者の間に何らかの有契性が見られる場合もある。その際に重要な役割を果たすのが、写像性である。たとえば、擬音語は自然音のイメージを写しているため、その記号表現と記号内容の結びつきは完全に恣意的ではない。同様に、アッカド語の子音重複にも写像性があると Kouwenberg は主張する。すなわち、

²⁹Kouwenberg (1997:117-182) 参照。同様の現象はヘブライ語 (Joüion-Muraoka 1996:155 参照) やアラビア語 (Wright 1967:31 参照) にも見られる。また、アッカド語の動詞につく -tan- という接中辞にも類似の現象が見られる。すなわち、-tan- の n は一部の語形で第 2 語根素に同化し、これを重複させ、動作の反復や複数性を表す。Kouwenberg (1997:69-88) 参照。

³⁰Kouwenberg (1997:36-37) は、継続性の Aktionsart を表す派生の操作が文法化されてテンスないしアスペクトを示すようになったと考える。

³¹Kouwenberg (1997:25) 参照。

³²Kouwenberg (1997:61-64) 参照。同じ語型がヘブライ語 (Joüion-Muraoka 1996:252-253 参照) にも見られる。

重ね書きされる子音は発音上も重なっていたからこそ、目的語や行為や事物の複数性を写すようになったと考えるのである³³。これはアッカド語の重子音の音声実体に迫るうえで、非常に興味深い視点であると言えよう。

3 楔形文字言語における子音の重ね書き

前節の考察によって、アッカド語には子音重複が存在し、それが(任意ながら)子音の重ね書きによって示されていたことが示唆された。これを前提として、本節ではシュメール文字、アッカド文字、フリ文字、ヒッタイト文字における子音の重ね書きの比較を試みる。

3.1 シュメール文字

上記の文字の中で最も古いシュメール語には次のような表記規則が存在する³⁴。

- ① /C₁V₁-C₂V₂/という音素列は C₁V₁-V₁C₂-C₂V₂ という文字列によって表記される。たとえば、/muna-/は mu-un-na-と表記される。
- ② 母音で始まる接尾辞が子音で終わる語に付く場合、この子音が重ね書きされる。たとえば、/kalag/「強い」に/a/という名詞化接辞が付くと、kalag-ga と表記される。

すなわち、シュメール文字には「子音の重ね書きによって子音重複を示す」という表記規則が存在しなかったことになる。シュメール文字における重ね書きには母音の場合も子音の場合も音声/音韻的な実体はなく、ある文字を前の文字にリンクさせることによって(字節は切れていても)発音上の切れ目がないことを示す役割があったと考えられる。

³³①～③では写像性のある意味だけを取り上げたが、これらの語形はそれ以外の意味も持つ。言い換えれば、語型の意味は写像性だけで完全に説明がつかわけではない。Kouwenberg (1997) は文法化にともない意味が侵食されたプロセスを想定する。

³⁴詳しくは、Hayes (1997) を参照。

3.2 アッカド文字

アッカド文字における子音の重ね書きに関しては、次のような史の変遷が知られる³⁵。

① 前3千年紀

- /-CC-/は通常シングルで書かれた。例：i-dì-in /iddin/ “he gave”。
- C₁VC₂-C₂V(C) は/CC/を表記しないことが多い。例：im-ḥur-ru /imḥurū/ “they received”、i-din-nam /iddinam/ “he gave me”。
- -CV-V-CV-で/CC/を表記する方法もある。例：li-i-ba /libba/ “heart”。

② 前2千年紀前半

- 古アッシリア語においては引き続き/-CC-/を通常シングルで表記したが、古バビロニア語で/-CC-/をダブルで表記する習慣が始まる³⁶。

③ 前2千年紀後半

- CVC 記号が増え、各地で/C/と/CC/の書き分けが進んだ。

アッカド語は当初シュメール文字の表記規則を引き継いだが、その後/-CC-/をダブルで表記する規則を生み出し、これを数百年かけて発達させていったことが分かる。

3.3 フリ文字

Wegner (2000:39-41) によると、フリ語において有声音と無声音の出現は環境から予測できるという。すなわち、語頭の子音は無声 (e.g. Da-ḥe /tahe/ “man”) ³⁷で、非共鳴音に続く単子音も無声 (e.g. aš-Du-u-u-uh-ḥe /ašt=o=ḥḥe/ “womanlike”) だが、共鳴音の直後 (e.g. ar-Te /arde/ “city”) と

³⁵ アッカド語の言語史全般に関しては、Buccellati (1997) を参照。各時代に使われた楔形文字の音価の詳細については von Soden and Röllig (1991) を参照。古アッカド語 (前3千年紀) については Gelb (1961)、古アッシリア語 (前2千年紀前半) については Hecker (1968:14-15)、古バビロニア語初期 (前2000年頃～前1900年頃) の状況については Whiting (1987) を参照。

³⁶ Reiner (1966:29-30) によると、ダブルのつづりで子音の長さを表記するのは古バビロニア期以後の改新である。

³⁷ 楔形文字には有声にも無声にも読める文字が多い。たとえば、TI 記号は/ti/とも/di/とも読める。また、DI 記号も/di/とも/ti/とも読める。有聲・無聲が弁別的なアッカド語の翻訳で

母音間 (e.g. i-Ti-ia /id=i=a/ “he strikes”) と語末では有声の異音に変わる。言い換えれば、フリ語の有声子音と無声子音は位置異音の関係にある³⁸。

それに対し、子音の重ね書きは弁別的である。たとえば、a-Ta-ni は “bolsters”、aD-Da-ni は “father” を意味する。Wegner (2000:40) によると、ダブルの子音は音声上無声で長く、それ以外の特徴も絡んでいたという。これを fortis / lenis、あるいは喉頭化 / 非喉頭化の音韻的対立ととらえる説があるが、結論は出ていない。

3.4 ヒッタイト文字

ヒッタイト文字には、Sturtevant の法則と呼ばれる表記規則がある。Melchert (1997:559-560) はこの法則を次のように要約する。

- ① 母音間では、シングルの閉鎖音 (有声ないし無声の文字で書かれる) とダブルの閉鎖音の間に弁別的対立がある (e.g. a-pa- “that” vs. a-ap-pa “back(ward), again”; na-ta/da “reed, arrow” vs. na-at-ta “not”)。
- ② 母音間でダブルでつづられる閉鎖音の多くは語源的に無声の閉鎖音にさかのぼるが、母音間でシングルでつづられる閉鎖音は先史段階の有声閉鎖音を引き継いでいる³⁹。

4 子音の重ね書きと言語接触

以上をやや単純化して整理すると、次のようになる。

- シュメール文字： シングル /C/ ダブル /C/
- アッカド文字： シングル /C(C)/ ダブル /CC/
- フリ文字： シングル /C/ [-fortis?] ダブル /C/ [+fortis?]
- ヒッタイト文字： シングル /C/ [+voice?] ダブル /C/ [-voice?]

は番号をつけてこれらをそれぞれ $ti (= ti_1)$ 、 $d\bar{i} (= di_3)$ 、 di 、 ti_4 と書き分けるが、有声・無声が中和されているフリ語の場合はアッカド語式の書き分けをする意味がない。そのため、ここでは有声・無声の中和された子音を大文字で表し、たとえば TI 記号は一律に Ti 、DI 記号は一律に Di と表記している。

³⁸この異音の交替は、ウガリト語式子音・音節型ウガリト系文字で記されたフリ語資料、およびニップルやヌジでバビロニア人がアッカド文字で記したフリ人の人名から割り出されている。

³⁹Melchert (1997:560) は、母音の長音化がからむ通時の変化から、ダブルで書かれた子音が実際に重複していたことが分かることを指摘し、ヒッタイト語が祖語から引き継いだ無声 / 有声の対立を fortis / lenis として再分析したと考える。

これを見ると、子音の重ね書きという同一の表記形式がそれぞれ異なる言語的機能を担っていたことが分かる。最大の違いは、言語的機能の有無である。シュメール文字の表記規則を引き継ぎ、それを表語音節型文字から音節表語型文字へと組み替え、さらにダブルとシングルをつづりに最初に言語的機能をもたせたのはアッカド文字である。その際、ダブルのつづりで重子音を表すようになったのは非常に自然な成り行きと言える。

しかし、アッカド文字とフリ文字とヒッタイト文字の関係は必ずしも明瞭ではない。中でもアッカド文字とヒッタイト文字の違いが目を引く。たとえばアッカド文字において DA 記号と TA 記号によって書き分けられていた有声 / 無声の対立がヒッタイト文字で-{#/V}-T/Da-と-VT-Ta-によって書き分けられている。このような現象は有声 / 無声という同じ音韻的対立をもった言語の話者どうしが接触して文字が伝わる場合には起きにくいと考えられる⁴⁰。

アッカド文字とヒッタイト文字の関係は間にフリ文字を介在させることによって説明することができるだろう。他のセム語と比較しても、またアッカド語の共時的構造から見ても、アッカド語において子音重複と有声性との間に何らかの関係があったとは思われない。しかし、重子音は一般に単子音よりも fortis である。したがって、有声・無声ではなく fortis / lenis の対立をもつ言語の話者がアッカド語の重子音を聞いたら、それを fortis と捉える可能性は十分にある。そこで、筆者はフリ語が fortis / lenis の対立をもっていたとする説を支持し、フリ人がアッカド文字を採用する際に重子音を fortis、単子音を lenis に置き換えたと考えたい。

他方、典型的な fortis の子音は無声として実現されることが少なくない⁴¹。そのため、フリ人とヒッタイト人が接触した場合、フリ人の発音する fortis がヒッタイト人の耳に無声に聞こえた可能性はやはり十分にある。言い換えれば、フリ人がヒッタイト人に楔形文字を伝えたと考えれば、その過程で fortis が無声子音に、lenis が有声子音に置き換わったとしても不思議ではない。

⁴⁰もちろん、Melchertのようにヒッタイト語の対立を fortis / lenis ととらえれば、この問題にも説明がつく。

⁴¹朝鮮語の濃音がよい例であろう。また、Ladefoged and Maddieson (1996:95-99) には両者が無関係ではないことを示す事例が他にも報告されている。ただし、彼ら自身は fortis / lenis と無声 / 有声の関係を一般化することに対しては慎重である。

以上の考察から、楔形文字言語間の接触が①シュメール語とアッカド語、②アッカド語とフリ語、③フリ語とヒッタイト語の順序で起こったと考えれば、四者の間に見られる子音の重ね書きの違いがうまく説明できることが分かる。この結論は楔形文字の伝播に関する従来の説に期せずして一致し⁴²、それを文字論の観点から補強する結果となった。しかし、フリ語とヒッタイト語の音韻に関してはなお不明な点が残るため、この分野における今後の研究の進展が期待される。

【参考文献】

- Buccellati, G. 1997 “Akkadian and Amorite Phonology,” in Kaye (1997), 3-38.
- Coulmas, F. 2003 *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福盛貴弘・池田潤 2002 「文字の分類案：一般文字学の構築を目指して」『一般言語学論叢』4・5, 32-56.
- Gelb, I. J. 1961 *Old Akkadian Writing and Grammar*, Second edition, revised and enlarged, Chicago.
- Hayes, J. 1997 “Sumerian Phonology,” in Kaye (1997), 1001-1019.
- Hecker, K. 1968 *Grammatik der Kültepe-Texte*, Rome: Biblical Institute Press.
- Hock, H. H. 1991 *Principles of Historical Linguistics*, Second edition, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Huehnergard, J. 1989 *The Akkadian of Ugarit*, Atlanta: Scholar's Press.
- 池田潤・高橋洋成・池田晶 2003 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6, 61-105.
- Joüon, P. 1996 *A Grammar of Biblical Hebrew*, translated and revised by T. Muraoka, Second Reprint, Roma: Biblical Institute Press.
- Khan, G. 1997 “Tiberian Hebrew Phonology,” in Kaye (1997), 85-102.

⁴²Speiser (1940-41:13f.) 参照。

- Kaye, A. S. (ed.) 1997 *Phonologies of Asia and Africa*, vol. I-II, Winona Lake: Eisenbrauns.
- 河野 六郎・千野 栄一・西田 龍雄 (編) 2001 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂.
- Kouwenberg, N. J. C. 1997 *Gemination in the Akkadian Verb*, Assen: Van Gorcum.
- Ladefoged, P. and Maddieson, I. 1996 *The Sounds of the World's Languages*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Lipiński, E. 2001 *Semitic Languages: Outline of a Comparative Grammar*, Second edition, Leuven: Uitgeverij Peeters en Departement Oosterse Studies.
- Melchert, H. C. 1994 *Anatolian Historical Phonology*, Amsterdam: Editions Rodopi.
- Melchert, H. C. 1997 “Hittite Phonology,” in Kaye (1997), 555-567.
- Reiner, E. 1966 *A Linguistic Analysis of Akkadian*, The Hague: Mouton.
- 佐々木嗣也 1994 「現代ヘブライ語の二次語根の分類」『オリエント』37/1, 75-87.
- Speiser, E. A. 1940-41 *Introduction to Hurrian*, New Haven: American Oriental Society.
- von Soden, W., and Röllig, W., 1991 *Das akkadische Syllabar*, Fourth edition, Rome: Biblical Institute Press.
- Wegner, I. 2000 *Hurritisch: Eine Einführung*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Whiting, R. M. Jr. 1987 *Old Babylonian Letters from Tell Asmal*, Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Wright, W. 1967 *A Grammar of the Arabic Language*, Third edition, Cambridge: Cambridge University Press.

Double Writing of Consonants in Mesopotamian Cuneiform

Jun IKEDA

This paper dealt with the graphemic rules involved in double writing of consonants, the graph sequence of the type $-(C)VC_i-C_iV(C)-$ (“CC writing” below), in four languages recorded in the Mesopotamian cuneiform, i.e. Sumerian, Akkadian, Hurrian, and Hittite, and asked the following questions with a focus on Akkadian: 1) what kind of linguistic function CC writing had in each writing system, and 2) how the differences, if any, emerged.

In Section 2, I examined from comparative and synchronic point of view whether gemination existed in Semitic languages in general and in Akkadian in particular, and how it was expressed in writing. I came to the conclusion that gemination did exist in Akkadian, which can be proved from phonological and semiotic point of view.

In Section 3, I compared linguistic functions that CC writing had in Sumerian (based on Hayes 1997), Akkadian (based on the results of Section 2 and other sources), Hurrian (based on Wegner 2000), and Hittite (based on Melchert 1997) cuneiform, which can be roughly summarized as follows:

- Sumerian : $-C- = /C/$ $-CC- = /C/$ (graphic doubling)
- Akkadian : $-C- = /C(C)/$ $-CC- = /CC/$ (gemination)
- Hurrian : $-C- = /C/ [-fortis?]$ $-CC- = /C/ [+fortis?]$ (reanalysis)
- Hittite : $-C- = /C/ [+voice?]$ $-CC- = /C/ [-voice?]$ (reanalysis?)

In Section 4, I tried to explain how the differences among them emerged. Sumerian cuneiform imposed no linguistic function on CC writing. Akkadian cuneiform adopted the Sumerian system as is, and invented a new graphemic rule, which related CC writing with gemination. It is hard to imagine that the Hittite system, which related CC writing with the feature $[-voice]$, derived directly from the Akkadian system. However, if we assume that the Hittites borrowed cuneiform script from the Hurrians and that fortis/lenis were distinctive in Hurrian, we could explain the developments as follows. Geminated conso-

nants (written -CC-) in Akkadian probably sounded for the Hurrians like their [+fortis] consonants, which in turn were perceived as [-voice] by the Hittites.

junikeda@lingua.tsukuba.ac.jp